第４１回原子力委員会
資　料　第　３　号

第４０回原子力委員会定例会議議事録（案）

１．日　時　　２００３年１２月２日（火）９：３０～１０：００

２．場　所　　中央合同庁舎第４号館７階 共用７４３会議室

３．出席者　　藤家委員長、遠藤委員長代理、木元委員、竹内委員、森嶌委員
内閣府
　後藤企画官（原子力担当）
文部科学省
　核燃料サイクル研究開発課　加藤課長
社団法人日本原子力産業会議
　政策企画本部　高橋マネージャー

４．議　題
（１）ＦＢＲ国際ワークショップの報告について（文部科学省）
（２）藤家委員長の海外出張報告について
（３）森嶌委員の海外出張について
（４）その他

５．配布資料
資料１　　ＦＢＲ国際ワークショップ　--地球的展望での原子力の役割及び高速増殖炉(FBR)の意義--　概要報告
資料２　　藤家委員長の海外出張報告について
資料３　　森嶌委員の海外出張について
資料４　　第３９回原子力委員会定例会議議事録（案）

６．審議事項

（１）ＦＢＲ国際ワークショップの報告について（文部科学省）

１１月２７日（木）に開催された「ＦＢＲ国際ワークショップ」について、加藤課長及び日本原子力産業会議 高橋マネージャーより資料１に基づき説明があり、以下のとおり意見交換があった。

（加藤課長）開催にあたっては、藤家委員長や遠藤委員長代理にご協力いただいた。翌日の新聞には写真入りで記事になったので、地元に対するＰＲの効果もあったと思う。

（遠藤委員長代理）少し前にフランスＣＥＡ（原子力庁）のブシャール局長が「もんじゅ」を視察された。今回、ＯＥＣＤ／ＮＥＡ（経済協力開発機構／原子力機関）のエチャバリ事務局長も「もんじゅ」を視察され、今回のワークショップにも参加された。「もんじゅ」の運転再開にむけての一助になったのではないかと思う。

（藤家委員長）毎年このようなことを開催し、海外の方に「もんじゅ」への期待等について講演していただいているが、なかなかその期待に応えられないでいる。地元の方々の理解を得るなど、地方自治体の判断に早く結びつけられるような形にしたいと思う。国際協力という点では、多くの国が「もんじゅ」による国際プロジェクトに期待しており、それに参加を希望している国が既にいくつかあるので、精一杯努力していきたい。

（木元委員）報道では良く書いてくれていたが、地元の方々の話を聞いたりして客観的に見ると、内輪でやっているという印象を受ける。福井県では敦賀で市民参加懇談会も開催したが、まず地元の方々が自らの課題を把握し、その上で、「もんじゅ」は世界で唯一の施設だから誇りを持ってやる、というような意志を持つようになることが必要という意見がある。一般の方々が１３０人ぐらい参加したとのことだが、その方々はどのように感じられて、今後どのように考えて行動されるのか、ということをフォローすることが重要である。そうでなければ、ただ内輪で会議を開催したというだけで終わってしまう。地元の方々が、少し心配なところがあるが、世界に唯一の施設だからやろうではないか、と思えるようになるところまで持っていかなければならないと思う。

（藤家委員長）地元に対し草の根運動のように取り組んできたことで、県民

の皆さんの意識も良いところまできていると感じている。

（木元委員）実際に地元に行ってみると、反対の意見も見受けられる。

（藤家委員長）全く反対がないということはあり得ない。どこで意思決定をするのか。５１対４９で意志を決定するのか、１００対０で決定するのか。まさしく今、地元はじっと見ているところだと思う。このようなときに、我々はどのように次につなげていくのかという点が重要だと思う。

（木元委員）話がある程度進んだレベルから議論を始めてもよい人もいるが、そうでない人もいる、ということの認識である。なぜ「もんじゅ」か、から議論を始めて、その上で「誇りに思う」「やってみよう」「そのとおりだ」といったことを言ってもらえるようにするという努力もしていかなければならない。資料に中村氏のご意見があるが、このご意見はもっともだと思う。

（藤家委員長）努力が足りなかったかどうかという点は主観によるところがあるが、ナトリウム漏えい事故の後に努力して取り組んできたことは、それなりに評価しなければならないと思う。

（木元委員）私も評価している。ただ、努力の中身が重要である。努力をしても、相手方に響かないと意味がない。その点についてフォローしてほしいし、日本原子力産業会議にも今回のワークショップの結果についてフォローをお願いしたい。

（高橋マネージャー）委員のご指摘を踏まえ、今後検討したい。

（加藤課長）文部科学省としても心して取り組みたい。

（木元委員）こういった点については、忘れないでやっていってほしい。

（藤家委員長）地元で頑張っている方々のことも良く知っている。このようなことについてどのように評価していくのか、意思決定はどのように行っていけば良いのか、ということを今問われているのだと思う。

（２）藤家委員長の海外出張報告について

標記の件について、後藤企画官より資料２に基づき説明があり、以下のとおり意見交換があった。

（藤家委員長）「Global 2003」は、アイゼンハワー大統領の「Atoms for Peace」

演説の５０周年を記念して開催された国際会議であり、米国やフランス、日本が参加した。いずれの国も、閉じた核燃料サイクルの推進が重要という認識を持っているところが共通しており、ＭＩＴ（マサチューセッツ工科大学）のレポート（今後５０年は、核燃料サイクルではなく直接処分が最良の選択と結論付けているレポート）に対し、大きな反論になったと思う。私からは、会議初日に、これからの世界の原子力を展望し、ＭＩＴレポートのような楽観的な考え方はできないと発表している。２日目には、ＭＩＴレポートに関しての討論会が行われた。壇上の討論者はほとんどが米国人だったが、フランスＣＥＡ（原子力庁）のプシャール局長が入っていた。ＭＩＴのカザック氏も含め、多くの方がこのレポートに対し否定的な考えを示していた。プシャール局長の発言では、最後に遠藤委員長代理と植松元動燃副理事長が作成したコメントについて紹介があった。このコメントは会場で配布されたが、用意していた部数では足りなかったようだった。その後いろいろと議論したが、このレポートについては１年ぐらいでフェードアウトするのではないかと考えている。しかし、我が国の情勢を見ると、そうでないかもしれない。いずれにしても米国ＤＯＥ（エネルギー省）がこのレポートのような方向の政策はとれないと明言していた。

サンタフェ・エネルギーセミナーは、日米の原子力関係者が率直に語り合うセミナーであり、今回で５回目となる。米国の議会関係者等の交通の便を考え、近年はワシントンで開催されている。日本からは、東京電力の不正事件やそれからの信頼回復について、また、電力自由化や核燃料サイクルについて取り上げた。米国からはＧＥＮ－ＩＶ（第四世代原子力システム）や先進核燃料サイクルなどブッシュ政権の原子力政策の強い姿勢が示され、世界の原子力開発の方向性がそろってきたように強く感じられた。

（竹内委員）このような会議において、ＭＩＴレポートについて議論することは良いことだと思う。ＭＩＴには、そのレポートに反対の方もいるのか。

（藤家委員長）そのレポートはＭＩＴ全員によるものではない。私の知っている方の中にも賛成でない方がいる。

（遠藤委員長代理）このレポートは要注意だと考えている。米国の政権が変わることがあれば特にそう思う。

（藤家委員長）政権が変われば、このようなレポートがあってもなくても政策が変わることがあると思う。

（遠藤委員長代理）民主党政権になると、このようなレポートを作成した人

が政権の中に入っていくことになる。

（藤家委員長）ＤＯＥのマグウッド局長はクリントン政権のときから担当している方だが、マグウッド局長はＮＥＲＩ（原子力エネルギー研究イニシアティブ）に携わっており、全体的にはあまり変わらないのではないかと思う。

（３）森嶌委員の海外出張について

標記の件について、後藤企画官より資料３に基づき説明があり、以下のとおり発言があった。

（森嶌委員）第１回の放射性廃棄物の地層処分に関する国際会議は１９９９年に米国デンバーで開催された。そのときは原子力委員でなかったが、高レベル放射性廃棄物処分懇談会の座長代理だったこともあって、この国際会議で講演しており、そのご縁で今回も出席することになった。

（藤家委員長）スウェーデンの処分場も視察する予定なのか。

（後藤企画官）１２月１０日にオスカーシャム発電所のＣＬＡＢ（使用済燃料中央中間貯蔵施設）やエスポ・ハードロック研究所を視察される予定である。

（４）その他

・事務局作成の資料４の第３９回原子力委員会定例会議議事録（案）が了承された。

・事務局より、１２月９日（火）に次回定例会議が開催される旨、発言があった。